

| | |
|---------|---------------------------------------|
| 氏名 | 寺 内 昇 てら うち のぼる |
| 学位の種類 | 医 学 博 士 |
| 学位記番号 | 論 医 博 第 14 号 |
| 学位授与の日付 | 昭 和 37 年 3 月 23 日 |
| 学位授与の要件 | 学 位 規 則 第 5 条 第 2 項 該 当 |
| 学位論文題目 | 種々なる状況に於ける歯胚移植時の周囲組織の変化に関する実験的研究 |
| 論文調査委員 | (主 査) 教 授 堀井五十雄 教 授 西村秀雄 教 授 美濃口 玄 |

論 文 内 容 の 要 旨

幼犬の顎骨内に発育中の歯胚を摘出して種々なる環境のもとに保存し、自家または他の動物の顎骨あるいは脛骨内に移植床を設け摘出歯胚を逆位置に移再植し、またあるものは2個の歯胚をおのおの縦断して各創面を接着したものを移再植して一定期間飼育した後、歯胚を構成する諸組織がどのような運命を辿るかあるいは移再植歯胚に対してその周囲組織が生物学的にどのような態度を示すかを組織学的に検索して次のような結果を得たのである。

1) エナメル質の形成途次にあるエナメル芽細胞はすみやかに変性消失するためエナメル質の形成は直ちに停止され、かえって漸次吸収されるが中間層ならびに外エナメル細胞はむしろ異状に増殖して重層扁平上皮様の組織像を呈し、複雑な生物学的態度を表わす。

2) 象牙質はいずれの場合においてもなお発育を継続し予成象牙質の添加が微量ながら営まれている。しかし日時の経過とともに吸収現象のほうが勝り、移植床周壁より増殖する骨組織と置き換えられ遂に同化する運命を辿るのである。

3) 歯乳頭は固有の組織構造を失ない、緻密な結合織によって置き換えられさらに骨様組織が新生し歯小嚢を貫ぬいて顎骨骨髓と連結する。

4) 歯小嚢ははなはだ強靱な修復力を有し実験後はほぼ正常な組織像を回復して結合織の配列は三層に区別することができる。

すなわち内層は緻密な繊維成分よりなり移植歯胚を被膜状に包裡し、中層は幅の広い鬆粗な結合織よりなり、また外層は移植床壁に接して強靱な嚢状を呈し歯胚全体を一括している。

以上の組織像を有する歯小嚢も日時経過とともに周壁より無制限に増殖する骨梁によってその固有構造は破壊され、遂に骨網によって占拠されるにいたる。

5) 移植床の周壁から新生する骨組織は無制限に増殖して歯小嚢組織を貫き繊細な骨梁は樹枝状に纏絡

して不規則な骨網状を呈して歯胚を圍繞するが漸次粗大となり吸収されつつある象牙質に癒着しこれを全く同化せんとする態勢を示している。

6) 脛骨上端部に移植した場合歯胚周囲に営まれる骨梁配置は他の部分とは異なって骨框様に整備し、急速に増殖する骨梁群は歯胚硬組織の吸収部に侵入してこれを同質化せんとする組織像を呈している。

7) 移植歯胚の上位に植立している乳臼歯には生理的な吸収機転が営まれ移植歯胚の状況如何にかかわらず正規の交換が行なわれる。

8) 永久歯の下方に移再植した歯胚はすみやかに吸収され、移植床周壁より増殖する骨組織に同化されるが永久歯の歯髄はほとんど影響をこうむらないのみならず、実験時に受けた歯面の損傷部も細胞性セメント質の添加によって修復されて正常な機能的咬合を営んでいる。

論文審査の結果の要旨

摘出犬歯胚を種々な条件下に同種自家または他家移植を試み、移再植歯胚および周囲組織の態度を組織学的に追究し、エナメル質、象牙質、歯乳頭、歯小囊、移植床、移植歯胚に対する既存乳歯および永久歯の組織学的変化を精細に観察し、多くの注目すべき新知見を得た。

本論文は学術上有益にして、医学博士の学位論文として価値あるものと認める。